

学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘は、いづれどこかにひびく



八戸市立 小中野中学校

平成29年10月18日(水)

No.99

文責：校長
工藤聡

「合唱コンクール成功」を支えたものは？

3年2組の合唱が終わり、すべてのクラスが歌い終わった瞬間、私は心からホッとした気持ちになりました。「歌がうまい」「きれいなハーモニーになっている」「声がおおきい」等々、いろいろな観点（カンテン：ものを見たり考えたりするときにとる立場）はありますが、私は一生懸命に歌ってくれさえすれば、後は何事もなく終わることだけを願っていました。たとえば、途中でピアノ伴奏が止まってしまうとか、ステージに上がる時に誰かが転んでしまうとかのトラブルなく、歌い終わった時に全員が達成感を持てる合唱コンクールであればいいと思っていたからです。まるで、孫が何かの大会に出場し、勝つとかいい賞をとるとかよりも、無事に終了することをひたすら祈っている、みなさんの祖父母のようなものなのです。

合唱コンクールは、体育祭とならんで各クラスの団結力が試される行事です。どのクラスも、“金賞”を目指して、音楽の授業はもちろんのこと、帰りの会や昼休みなど協力しながら自分たちの合唱を創り上げてきたと思います。体育祭が一人ひとりの気力や体力を結集させて、目に見える形でエネルギーを激しく発散させる行事であるのに対して、合唱コンクールは、個人の感性や表現力を全体で共有しながら、それを静かなエネルギーとして時間をかけて音楽の形にしていき発表する行事です。体育祭は、事前の練習や準備がうまくいかなくても、本番当日の頑張りで成功することも可能な、瞬発力が要求される行事です。それに比較して、合唱コンクールは地道な練習を何日も繰り返しながら、一つの『音』を全員で創り上げなければなりません。まさしく、継続性が大切なのです。練習をいいかげんにやっておいて、本番だけは頑張ろうと思っても決してできない行事が合唱コンクールです。不協和音（フキョウワオン：同時に鳴らす複数の音が調和せず、不安定な感じをあたえること）があるのも、事前の練習がしっかりしていない証拠なのです。ですから、合唱コンクールまでは、クラスで思うようにまとまらなかったり、時には互いにぶつかり合ったり、もしかするとケンカにまでなったことがあるかもしれません。そういったことを乗り越えてきたからこそ、歌い終わった後の達成感や充実感があるのだと思います。

いろいろなクラスの学級通信を読ませてもらいました。そのどれにも、「やり遂げた」という感想がありました。まさしく、一人ひとりの努力が、クラス全体の歌声となって結実（ケツジツ：結果が出ること。成果をあげること）したわけですが、決して自分一人だけではできなかったことです。次の話を読んでみてください。

ある時、仏様が道端に立っていると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。（もちろん、男には仏様の姿は見えない。）そこには大変なぬかるみがあって、車はそのぬかるみにはまってしまった。男は懸命に引くが、車は全く動かない。それでも男は、汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は動かない。仏様は、しばらく男の様子を見ていたが、その時ちょっと指でその車にふれた。その瞬間、車はスーッとぬかるみから抜け出た。男は、カラカラと車を引いて行ってしまった。

みなさんの合唱がうまくいったのは、自分一人だけの力ではなかったはずです。指揮者や伴奏者、パートリーダーが、それぞれの立場で力を発揮してくれたはずです。音楽科の工藤裕子先生や担任の先生の指導やサポートも忘れてはなりません。仏様のように、みなさんには見えなかった（気がつかなかった）誰かの言動や陰での支えがみなさんの背中を押してくれたからかもしれません。そういったことに感謝することで、今まで見えてこなかった何かが、少しずつはっきりしてくるはずです。

せっかくいい合唱コンクールになったわけですから、これを合唱コンだけで終わらせるのはもったいないですね。11月22日の70周年記念式典の校歌や国歌につなげてほしいと思います。